

研究課題	個別最適な学びと協働的な学びによる、「未来を切り拓く力」の育成
副題	～ICTを活用し、全ての子どもが「学びをデザインする」授業の工夫改善～
キーワード	
学校/団体名	富士見市立針ヶ谷小学校
所在地	〒354-0017 埼玉県富士見市針ヶ谷 2-38-1
ホームページ	https://www.city.fujimi.saitama.jp/madoguchi_shisetsu/06school/shogakko/2010-0512-1127-137.html

1. 研究の背景

令和2・3年度の国語科の学校研究で、児童が自らの考えを表現する力の育成に取り組んだことを通して、全国・埼玉県の学力学習状況調査の国語において、平均を上回り、児童個々の学力の伸びも見られた。一方、質問紙調査においては、国語をはじめ、学習に興味・関心のある児童が半数程度にとどまり、学力と意欲の間での一種の「ねじれ」の状況が確認された。

そこで令和4年度は「個別最適な学びと協働的な学びによる『未来を切り拓く力』の育成 ～子どもが『学びをデザインする』授業の工夫改善」を研究主題に、学校研究に取り組んだ。児童の学習において特に有効であったのが、ICT機器を活用した学びであり、ICT機器を用いることで、児童がより意欲的に学習に取り組む姿勢が見られ、かつ教職員のICT活用スキルも向上し、STEM教育の必要感も高まった。また、研究授業や研究協議、外部指導者による指導助言等を通して、児童が「学びをデザインする」視点として、「めあて・学び方・学びの確認」という3つの学習場面への着目が重要であることを見出すことができた。

これらの研究の成果や現状を受け、今年度は副題を「ICTを活用し、全ての子どもが『学びをデザインする』授業の工夫改善」に更新し、特別な指導や支援を要する児童にも焦点をあて、ICT機器を意図的・効果的に活用しながら、誰一人取り残すことなく未来を切り拓く力を身に付けられるようにすることを課題とした。一人一人の可能性を最大限に引き出すことができるような指導の工夫改善に取り組んでいくこととした。

2. 研究の目的

- ①令和の日本型学校教育×針ヶ谷小学校 ver の実現を目指し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に推進しながら、全ての児童に予測不能な「未来を切り拓く力」を身に付けさせていく。総じて学習指導要領に示された主体的・対話的で深い学びを具現化する。
- ②児童の背景や特性・意欲の多様性を前提に、学習者である児童の視点に立ち、どの児童も、いつでもどこからでも、誰とでも、自分らしく学ぶことができ、誰一人取り残されず、一人一人の可能性が最大限引き出されるようにする。
- ③「学びをデザインする」3つの視点として、「めあて・学び方・学びの確認」の学習場面に着目する。各場面で児童がどのように学びに向かっているのか分析し、授業の工夫改善・学習方略等を研

究する。

- ④特別な指導や支援が必要な児童にも焦点をあて、誰一人取り残すことなく未来を切り拓く力を身に付けられるようにする。
- ⑤STEM教育の視点も取り入れ、教科横断的に情報活用能力・プログラミングの基礎的能力・課題解決能力の育成も図っていく。
- ⑥研究で得た実践と成果及び課題を、富士見市内及び市外近隣に向けて研究発表し、新しい学びの基とする。

3. 研究の経過

時 期	取り組み内容
4 月	<ul style="list-style-type: none"> ・学校研究全体会（今年度の研究の方向性や予定について） ・アセス研修（校内研修・指導者：中林浩子先生） ・前期アンケート実施
5 月	<ul style="list-style-type: none"> ・デジタルシティズンシップ研修（校内研修・指導者：為田裕之先生）
6 月	<ul style="list-style-type: none"> ・STEM研修（校内研修・指導者：野村泰朗先生）
7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究授業（第4学年1組 総合的な学習 「安心・安全な街 針ヶ谷」 指導者：横田典久先生、為田裕之先生） ・1学期カルテ作成、学校研究発表会に向けた学習指導案作成等 ・アセス研修（校内研修・指導者：中林浩子先生）
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究授業（第5学年2組 国語 「物語の全体像をとらえ、考えたことを伝え合おう 『たずねびと』」 指導者：水沼美和先生、為田裕之先生、中林浩子先生） ・校内研究授業（第1学年2組 算数 「3つのかずのけいさん」 指導者：田中芳人先生、為田裕之先生）
10 月	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期カルテ作成、学校研究発表会に向けた学習指導案作成
11 月	<ul style="list-style-type: none"> ・後期アンケート実施 ・学校研究発表会 （第2学年1組 算数「九九をつくろう」 指導者：田中芳人先生） （第3学年1組 総合的な学習の時間「針ヶ谷マスターになろう」 指導者：横田典久先生） （第6学年2組 国語「筆者の思いをとらえよう 『やまなし』『イーハトーブの夢』」 指導者：水沼美和先生） 講演：「ICTを活用した『未来を切り拓く力』を育む学びの場」 講師：フューチャーインスティテュート株式会社 代表取締役 文部科学省 学校DX戦略アドバイザー 教育ICTリサーチ 為田 裕行先生
12 月	<ul style="list-style-type: none"> ・STEM研修（校内研修・指導者：野村泰朗先生）

	・学校研究のまとめ
1月	・STEM研修（校内研修・指導者：野村泰朗先生）
2月	・研究推進委員会（次年度の学校研究に向けて）
3月	・学校研究全体会（次年度の学校研究の確認）

4. 代表的な実践

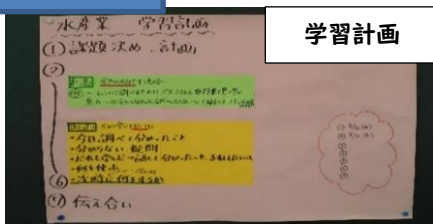
「学びをデザインする3つの視点」系統的な指導の実践

学びをデザインする3つの視点		
めあて	学び方	学びの確認
低学年	中学年	高学年
<p>目指す児童の姿</p> <p>教師とともに課題を設定し、様々な方法を試みながら、学習を進めている。</p> <p>具体的姿)子どもが…</p> <p>教師とともに課題を見つけたり、その解決に向けためあてを立てたりすることができる。</p> <p>課題の解決に向けて、教師と共に、学びを進める方法を選択することができる。</p> <p>自らの学習進度を振り返り、次の学びに生かすことができる。</p>	<p>目指す児童の姿</p> <p>自ら課題を設定し、自分で選択した方法で学習を進めている。</p> <p>具体的姿)子どもが…</p> <p>課題を見つけ、その解決に向けためあてを自ら立てることができる。</p> <p>課題の解決に向けて、相手や目的に応じて、学びを進める方法を自分で選択することができる。</p> <p>自らの学習進度だけでなく、学習方法についても、自分にとっての価値を見出し、次の学びに生かすことができる。</p>	<p>目指す児童の姿</p> <p>自ら課題を設定し、見通しをもって、自分が意図的に選択した方法で学習を進めている。</p> <p>具体的姿)子どもが…</p> <p>相手や目的に合わせて、課題設定をしたり解決に向けた見通しをもったりすることができる。</p> <p>課題の解決に向けて、相手や目的に応じて、効果的に学びを進めたり、考えを伝えたりすることができる。</p> <p>自らの学習進度や学習方法について振り返りを蓄積し、次の学びに向けた自己調整をすることができる。</p>
<p>教師の手立て</p> <p>児童の興味関心をひき、必要感をもって学習を進めることができる導入をする。</p> <p>年間を通して様々な学習の方法に触れられるようにし、それぞれの方法のよさを見出せるようにしていく。</p> <p>振り返りの視点「わがとも」を視点に、自分の学びを振り返られるようにする。</p>	<p>教師の手立て</p> <p>児童がゴールを明確にもてるよう、興味関心をひき、必要感や相手意識・目的意識をもてる導入をする。</p> <p>どのような学び方が自分の目的に合っているのか児童に問い直していくことで、主体的に選択できるよう促す。</p> <p>振り返りの視点「わがとも」を基に、自分の学びと学び方を振り返られるようにする。</p>	<p>教師の手立て</p> <p>児童が自らの学びの蓄積から課題を設定しているよう促し、学習のゴールを明確にできるようにしていく。</p> <p>児童の一人一人の学びに寄り添い、よりよい学習を進めていけるよう関わっていく。</p> <p>児童が学びの振り返りを蓄積できる環境を整える。児童の学びを価値づける言葉かけをしていく。</p>

左の系統表を踏まえ、学習指導案にはその単元におけるより具体的な手立てを記載した。
6年間を見通す意識を教師が共有して授業に臨めるようになり、目指す児童像に向けて、ブレのない学びの時間にする事ができるようにした。

3つの視点での授業づくりをしていく中で、大きく2つの点が必要であると分かってきた。1つ目は、児童が学びを選択するためには、身につけるべき資質・能力を学びの中で獲得し、それを児童自身で価値づけていくこと、2つ目は教師が伴走者として支援するために、できるだけ多くの学び方を提供し、児童が選択できる引き出しを増やせるようにすることである。これら2点を実践に生かしながら研究を進めていった。

めあて



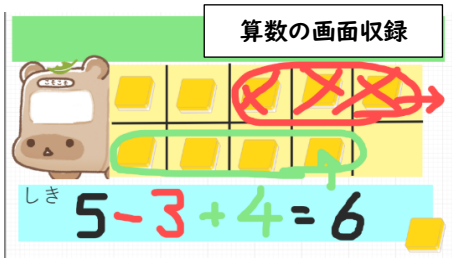
○学習のめあてを立てる場面では、児童が相手や目的に合わせて、課題を設定したり、解決に向けた見通しをもったりすることができることを目指している。そのため、学びの本質であるゴールに迫るために、まずは教師が教材研究の段階で、その学習、その単元で児童



が身に付けるべき力を明確にすることに努めた。どのような力を身に付けるのかを、教師と児童が明確に共通理解できるようにすることで、児童が自信をもって自ら単元計画を立てたり、学習の見通しをもったりできるようにしていった。

○単元のゴールを設定する際、児童のこれまでの学びを振り返り、その単元で新たに身に付ける力を明確にして児童と共に設定するようにした。児童が目的意識や相手意識をもてるようなゴールを設定することで、学び方を自己決定できるよう、促していった。

学び方



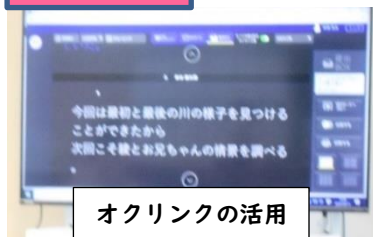
○学習における様々な選択の場面で、「教師が」決めるのではなく、「子どもが」決めることができるよう、学び方の選択を子どもたちに委ねていった。

○課題解決に向けて、相手や目的に応じて、学びを進める方法や相手を自分で選択できるように意識的に促していった。そのために、低学年から様々な学習方法に触れるとともに、学び方の価値づけをしていった。どのような方法で学習することが、自分の目的のために合っているのか児童に問うことで、解決に向けた学び方の選択を行えるようにしていった。

○学習過程において、具体物や ICT を使い分けて自分に合った方法で思考したり、パワーポイントや模造紙・画用紙、画面収録などを用いて表現したりするなど、様々な学習方法の選択ができるよう環境を整えた。

○話し合い場面では、ICTを活用しながら自分の考えを共有することにより、他の児童の考えに触れることができ、考えがまとまらない児童にとっての学び方の選択肢になった。

学びの確認



○学びの確認では、「学習内容」についての振り返りだけでなく、「学習進度」や「学習方法」についての振り返りを蓄積することで、学びの自己調整ができるようになることを目指している。

○毎時間の振り返りはオクリンクを中心に行った。各教科の単元ごとに、振り返りのカードをまとめて提出ボックスに入れられるようにし、児童がいつでも自分や友だちの考えを見ることができるようにした。自分の学びの過程を蓄積できることに加え、前時までの振り返りや友達の学習を元に、児童が自分で本時の学習のめあてを立てることができるよう促していった。

○振り返りをする際の視点として、低中学年では「わがとも」(㊦かったこと、㊦んばったこと、㊦もだちの考えのよいところ、㊦っと知りたいこと)を提示した。また、高学年に向けては「わがとも」以外にも、自分で選択した学び方についての考えや、次時に学びたいことなど、児童自身が振り返りに必要だと感じる視点も必要に応じて追加し、

自身の学びを価値づけることができるように促した。
 ○学びの確認は、学習の終末だけでなく、学びの過程において適宜促していくことで、見取りと支援を一体的に進めていくようにした。

ICTの効果的な活用に向けた実践共有

針ヶ谷小学校 ICT活用9つの視点

1. 興味を喚起する
2. モチベーションを喚起する
3. 理解を促進する
4. 授業を効率化する
5. 進捗・理解度の確認をする
6. 教材を拡充する
7. 表現・思考手段を拡充する
8. 情報共有手段を拡充する
9. 学習環境を拡充する

学習の目標	資料をもとに比較・検討し、自分の考えをまとめる
学年	5年生
教科	社会
単元名	縄文のむらから今頃のくにへ
活用機器	タブレット パソコン Microsoftホワイトボード インターネット
活用目的	ICT活用 の視点
活用方法	1 前項までのふりかえり 2 めあての確認 3 調べ 4 情報を共有する 5 自分の考えをまとめる 6 ふりかえりをする
活用活動・内容	○縄文時代や弥生時代について、教科書や資料集を見て、基本的な情報について見てきた。 ○めあて 縄文時代の弥生時代、住むならどっち？ ○教科書、資料集、インターネットなど、たくさんの中から自分が調べたい情報について調べ、「基本情報」「よい点」「課題点」の3つの観点で整理していく。 ○調べたことを、自分のノートやオンラインカード、パワーポイントなどを使って整理していく。 ○自分で整理した情報をもとに、グループで意見交換をし、縄文時代と弥生時代を比較しながらさらに考えを深めている。 ○改めて自分の考えをまとめ、提出する。 ○学習の振り返りをする。 評価の観点（提出したまとめ） 資料をもとに、具体的な情報を挙げて比較し、自分の意見をもとにまとめている。
活用機器・方法	インターネット ホワイトボード →自分で調べたことをカードに書いて整理していく。 オンライン パワーポイント →自分の考えをまとめやすい方法を選んでまとめる。 →内容は、「どちらに住みたいか」と「その理由」 →資料を整理にまとめる

＜わたしの振り返り＞

はじめ
Point
いまいち
Point
これから
Point

- 児童の意見はどれも良かった。1人1人納得できたのがよかった。
- 議論や学習したことを発表することができた。
- 知識面の定着度合いの差取りが難しい。
- 聞き上げるための問い出しが難しい。
- 知識をみんなで整理できた。
- 情報も適切に集っては出す方を育てていきたい。

＜その他資料＞

・Microsoftホワイトボード

・オンラインでの意見集約

意見集約のやり方
→意見集約のやり方
→意見集約のやり方
→意見集約のやり方

為田氏による
ICT活用目的9類型
出典：「学校のデジタル化は何のため？ 教育ICT活用目的9類型」

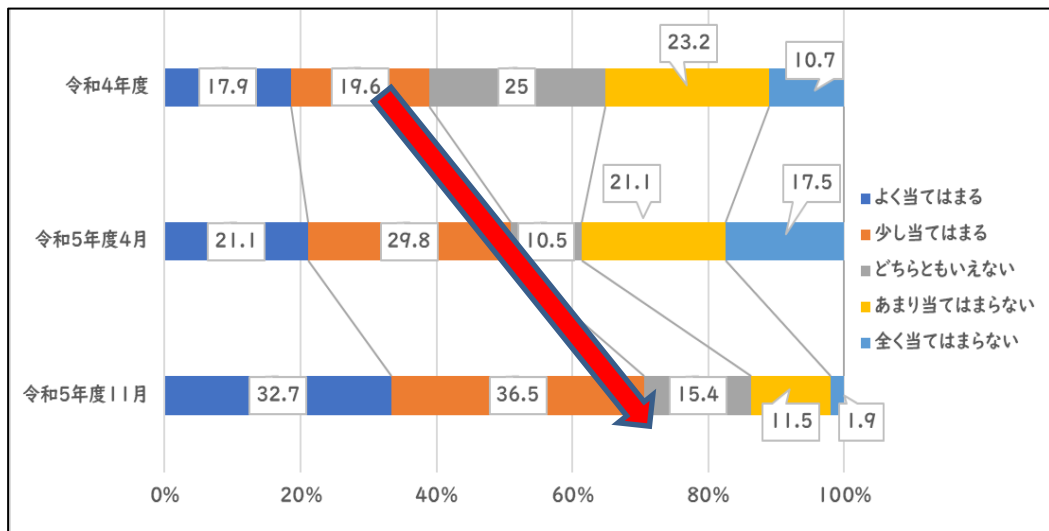
針小カルテ

「ICTの文房具化」に向け、学習における端末の活用目的をより明確にするために、「ICT活用目的9類型」をもとに各学年で行った授業実践を、「針小カルテ」として取りまとめ、校内で共有するとともに、校内研修で活用した。
 「何のためにICTを使うのか」を教師も児童も意識して活用し、学習におけるICTの効果をもっと高めた。また、カルテの作成や校内での情報共有により、どの学年・クラスでも、同じように活用するようにし、全体的なICT活用スキルの向上にもつなげた。

5. 研究の成果

・児童へのアンケート結果より、多くの児童が自分の学び方や学習方法を選択することに対して、前向きに取り組むことができるようになってきた。また、その学び方が自分の目的に合っているかを確認しながら取り組むことができる児童が増加した。

「勉強のやり方が、自分に合っているかどうかを考えながら勉強しているか」の回答結果



- ・分からないことがあると先生や友達に聞くことができる児童が増加している。これは、学びが自分事となり、分からないことに対して、知りたいという意欲が向上していることの表れだと考える。また、教師と児童との関係性が良好であることも理由の一つである。本校では、年2回アセスを実施し、児童の見取りを生かして授業実践してきた成果が表れた。
- ・単元の学習の中で、児童が「〇〇の続きがやりたい!」「今日はこれをやりたい!」など、前向きに学習に取り組もうとする姿勢が多く見られるようになった。
- ・ICTを活用することで、情報の共有を繰り返し行うことができ、適宜自分の学びを振り返ったり、友達の考えを参考にしながら自分の考えをもったりできるようになった。

6. 今後の課題・展望

- ・児童に学び方を委ねる際に、指導事項を明確にしておくことがより必要になってくる。また、児童の学びの見取りと価値づけを、より一層的確に行っていく必要がある。
- ・教師がファシリテーターとしての意識をもって授業準備等を行うとともに、児童の学びを支えていくことがより求められる。また、児童が「学びをデザイン」しながら学習に取り組むことが、全国や埼玉県の学力学習状況調査の結果にどのように反映されるのかを、次年度の結果を分析することを通して明確化し、更なる研究の充実につなげていく。
- ・特別な支援や配慮を要する児童の学びについても研究を重ね、「全ての子ども」が学びの質を高めていくことができるようにしていく。

7. おわりに

今年度は2年間の研究の集大成として、ICTを活用し、全ての子どもが「学びをデザインする」授業の工夫改善を進めながら、「未来を切り拓く力」を育成することができてきている。研究を進める中で、様々な課題が重なり、目指す方向性について迷いが生じることもあったが、「子どもの学びを豊かにすること」という原点に立ち戻ることで、より洗練された授業を実現していくことができた。今後も「学びをデザインする」授業の工夫改善を一層追究し、市内他校のみならず市外の学校に向けても研究実践とその成果を発信し続けながら、本校の児童の学びを一つの「スタンダード」として広げることを目指していきたい。

8. 参考文献

- ・文部科学省「小学校学習指導要領 解説 国語編/算数編/総合的な学習の時間編」(平成29年)
- ・為田裕之 「一人1台のルール」(2021年7月 さくら社)
- ・為田裕之 「学校のデジタル化は何のため? 教育ICT利活用の目的9類型」(2022年3月 さくら社)
- ・蓑手章吾 「個別最適な学びを実現するICTの使い方」(2022年4月 学陽書房)
- ・泰山 裕 「『思考ツール×ICT』で実現する探究的な学び」(2023年7月 東洋館出版社)
- ・堀田龍也/為田裕之/稲垣忠/佐藤靖泰/安藤明伸 「学校アップデート」(2020年5月 さくら社)
- ・赤坂真二 「個別最適な学び×協働的な学びを実現する学級経営」(2022年4月 明治図書)